

菊池短歌会

5月詠草

立ちばなしの声弾みある雨明けの若葉がくれに姿は見えねど 中原ちえ子
生業のさむしわれにも春は来て麦は麦なる花ふりやまず 村上 咲江
青若葉あわい綾なす花つつし城山参道身も染むばかり 山下 菊代
花水木医院の庭に咲き明かりわれの虚ろを癒す淡紅 岩木 妙子
富士山と駿河の春の海の色六年振りの我を迎えし 余後やす子
空の青吸ひ込みすぎて弾けたか野に散らばえるおおいぬふぐり 岩永富美子
農捨てて渡らい草は乏しくもけふ爛漫の桜の下陰 たをたをと藤の花房揺れて咲く車椅子を停めて見上ぐる 山城 静子
水ややにぬるみて洗ひし水槽に金魚の鱗きらきら光る 山内 直子
楠若葉萌えたつ下に思ひるいづれ書かねばならぬ手紙を 怒留湯たけよ

万句の里俳句会

5月句会

湧水に映る若葉を掬ひけり 丸山美代子
万緑の奥へ奥へと誘ひけり 岩木 敬治
筍の皮脱ぎすてし青さかな 打出 貞
遠目にもそれとはわかる桐の花 野中 公枝
これよりは闇の虜になる蛍 隈部 輝子
城若葉色にも香にも酔ひにけり 加藤 妙子
際立ちて沸き上がりたる椎若葉 北村 妙子
雨あがる麦秋の野の煌めきて 平山 邦子
夕映えを一挙に集め麦の秋 宮本 雅子
麦秋の絵画のごとく暮れなすむ 林 まつ子
旅の宿車座になり新茶汲む 富田 幸子
新緑や散歩の友を見送りぬ 茨木 幸子

肥後狂句桜会

5月例会

泣こごたる 燃ゆる思いの通じらん 狩野 本六
ウォーキング 肌で感じる季節感 高倉 新米
泣こごたる 出来過ぎて捨てにゃん野菜 光堀 善教
一念発起 けいこ土俵に熱の入る 小川 繁美

泗水短歌会

5月詠草

泣こごたる 親みるという子のおらん 北村 竹刀
バイキング 鉢盛りのごつ入れちくる 須藤 新生
泣こごたる 風とダブった花粉症 東 栄次
ウォーキング 新緑に吸い込まれそう 中山 昌子
泣こごたる 俺の竿だけヒットせん 田島 哲郎
馬耳東風 ボケが幸せかもしれん 太田 雄三
あと僅か やつとわが家になるローン 安武 二山
泣こごたる 彼女の居った好きな人 荒木 玄海
豚小屋は埋め消されて跡もなし働きづめの自分史おぼろ 内田つね代
手鞠花の花かげに沿い茶の葉摘む初夏の風追い緑を追いて 高藤たつの
公園のキッズサッカーの声ひびく太く大きな声も混りて 中山 定子
道の辺の深むみどりの五月闇もしやお化けが潜みいるかも 福原美智子
鞍岳より阿蘇への連山絵のごとしあの山歩き越えし日ありき 藤本のり子
麦の穂が風に揺られて踊ってるいつも通る道思い出の道 宮本 峯子

せせらぎ俳句会

5月例会

初夏の風ひねもす羅漢欠伸して 五丁 義昭
地球儀も青く輝き五月晴 内村 泊虹
開け放ち五月の生气取り入れん 吉岡 民子
浴槽に見等たわむれて菖蒲の湯 服部 静子
カーブミラーに夏の帽子をととのえる 藤本アツ子
鳥交る孔子を祀る廟の上 坂本まつえ
若緑窓に溢るる新居訪ふ 内村 鈴子
新しやがのするりと絹の脱ぐごとく 寺本 和子
吹く風も蠢く虫も五月かな 村山 数恵
今年また薩摩粽の届く頃 藤本 邦治
やまぼうしちようちよのようなかたちだな (小五) 渡辺 一史
ゆすらうめ葉っぱの下にかくれてる (小五) 渡辺 大寿

七城短歌会

5月詠草

あまゆるなその鼻声にあだまされん 江 彩
とてもとてもあたし一人じゃ荷の重か 梅 月
任せとけ 育児休暇は俺がとる 千 笑
任せとけ 役所にやまあだ顔のきく 英 坊
よろめいて ツエのお陰で歩かれる 五 女
任せとけ アゴで良かなら負けんバイ 寛 べ
任せとけ 黙って俺についてこい 三 代
よろめいて とうと田畑も打ち売らす 水 光
よろめいて 思はず彼に抱き付いた 美 樹

旭志文芸俳句会

5月詠草

母の日にメロン供えし佛前に風がそよぎて香を立つる 緒方 寛子
睨みつつ積木をたかくなほ高く幼が積めば我手を拍く 下川 つぎ
気が向きて蓮華咲く野に出で来しが立ち止まりては背筋をのばす 池田カツ子
慰霊祭に父への思いを娘が述ぶるシベリア抑留の事が身に泌む 古間 充子
誕生日今日満開の遅ざくら 芹川 蓉子
石楠花に誘われ拜む磨崖仏 中尾ヨシコ
草萌えて畑にせかるる農ぐらし 芹川のり子
少しだけ芸する曾孫日脚のぶ 岩根サチ子
蛇よけの鈴ふり山の山椒つむ 出田みどり
春の雨津和野の鯉の鮮やかに 水谷 ミネ
夫の葬春の疾風の吹き抜ける 東 芳子
筍に惚の芽そえて春の膳 郷 ミヤ子
綾取りの手は覚えるし夏木立 中山 栄子
水面渡りて鶯鳴くや散歩道 工藤 房子
石楠花や妖精の羽広げたり 岩根 良子

肥後狂句水笑会

5月例会

よろめいてよか男だけ抱きつかす 美 由
立入禁止 爆弾の上寝とらした 三 水